

# 発生から2週間長引く避難所生活

## 新潟県中越地震

新潟県中越地震から二週間。被災者らは避難所や車中での生活が続く。震災発生から一週間までの日記をつづっていた同県川口町の無職、松崎千鶴さん(65)の写真を



はその後も避難生活を送りながら日記をつけている。発生から一週間の日記には、余震などへの「恐怖」が中心に記されていたが、その後の一週間は避難所の救援物資

### 川口町・松崎千鶴さんの日記

■十月二十九日(金曜日)  
お互いに会えば「がんばろうね」の声をかけあいながら歯を食いしばって耐えている。「一人では絶対行かないように」との厳重な注意にもかかわらず、つい(自宅に)足が向く。どうしても持ち出したものを取りに行く。知人、友人の電話番号、貴重品その他思い出の品物。四十年前の教員生活の種々の記録。教え子たちの写真。思わず涙がこぼれる。

■三十日(土曜日)  
雨は困る。土砂崩れが怖い。数年前、このころに雪が降ったっけ。小千谷方面も堀之内方面への通行も可能にな

り、孤立から解放されたようだ。どこか別の町に、地震のなかった普通の町に行ってみたいね。救援物資の配分についても不公平と自分勝手が横行らしい。小さいけれどもたくさんのトラブル。仕方ないのかな。でもいやだなあ。松崎さんは地震から一週間目ぐらいまでは車中で生活を続けていたが、最近避難所のテントと車中を転々として生活している。小学校の先生をしていた松崎さん。三男一女はそれぞれ小千谷市、魚沼市(旧小出町)などで生活している。昨年、夫を亡くして以来、一人暮らし。避難所などには救援物資が続々と届いているため、物資は豊富だ。だが、避難生活が長引くことでストレスはたまり、人間関係のきしみが目に

## ストレスで人間関係にきしみ

# みんなの心 荒廃

の配分などをめぐり、人間関係がぎくしゃくしている様子が浮き彫りになっている。被災者の心は疲れ切り、ストレスはたまる一方だ。(渡部一実)

つくようになってきた

■十一月一日(月曜日)  
昨日から(新潟市内の友人に)携帯を持たされた。一人暮らしの高齢者だから、こまめに連絡しよう。ホイッスルも付けてくれた。家屋が倒壊して下敷きになったら、ホイッスルを鳴らさない」とみんな心配してくれる。(中略)  
今日で(地震から)十日目。みぞれの季節になる。どうなるのだろう、不安はつのる。今後ずっと救援物資が届くとはかぎらない。自衛隊さんがごはんをたいてくださるうちはいいいが、引き上げた後はどうするのだろう。それまでに帰宅?または仮設住宅?みんなどうするの。雪が来るぞ。震度7と正式発表あり。今でも恐ろしい。きつと家に帰っても怖さだけを思いただしてしまえそう。トラウマだ。

■二日(火曜日)  
食事中も、今後の不安についでの話が出る。(中略)それぞれの後ろ盾のあるなしで、黙認されたり、攻撃されたり、アチコチで激しい言葉、やんわり皮肉を交えた言葉が聞かれるのは悲しいし悔しい。  
天然ダムが満水になったらどこへ向かって流れ出すのだろう。仮設住宅の話もなかなか進まないのかな。そのうちに社会からも忘れられるときが来るのかな。  
■三日(水曜日)  
その日その日をなんとか生き当たりばったりに生きて、十日間。まさにホームレス生活。だんだん慣れてくる。他の土地で災害発生の際は私も進んでボランティアに出かけよう。人さまの好意に甘えるだけでなく、思い切って一歩前へ。  
■四日(木曜日)  
救援物資の配分。地区に配られた物の末端におけるみにくい行為が横行。早い者勝ち、強い者勝ち、恥ずかしいありよう。みんなの心が荒廃し、くさって来た。我先にと焦って「もらえるものならなんでもほしい」と目の色を変えている。